OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞滝川幸司著　『天皇と文壇ー平安前期の公的文学』
Author(s)	石原, のり子
Citation	語文. 2007, 89, p. 59-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

滝川幸司著『天皇と文壇―平安前期の公的文学―』

石原のり子

平安時代の公的文学は漢詩文である、および、『古今和歌集』編纂によって、和歌が漢詩文と同等の公的文学としての地位を獲得した。これらはもはや定説とされており、それゆえ天皇を中心とする律令国家体制の中で、漢詩文がどのように公的文学として組み込まれていたのか、そして『古今和歌集』および和歌の公的文学としての地位および意義について、具体的な考察がなされてこなかった。これにたいする疑問にこたえるのが、本書である。

著者の関心は、『古今和歌集』勅撰の意味を考えることから始まった。それを明らかにするために、宮廷詩宴についての詳細な検討をなされ、詩宴を軸とした天皇の文壇をめぐる論考を重ねてこられた。結果、本書はその道程を遡るように構成されている。

まず、序論（「天皇と文壇―平安前期の公的文学に関する諸問題―」）において、これまでの研究動向と問題の所在を明らかにし、第一編「天皇の文壇」で、嵯峨・淳和朝、宇多・醍醐朝、村上朝、一条朝それぞれの文壇活動とその変遷を辿る。続く第二編「宮廷詩宴考証」では、内宴、重陽宴、花宴、曲水宴をとりあげ、歴史資料を精査し、その実態を明らかにする。本編は、『源氏物語』をはじめとする物語研究にも資するところ大である。そして、第三編「公的文学としての和歌」においては、宇多・醍醐朝の歌壇、『古今和歌集』勅撰直前の延喜二年飛香舎藤花宴についての考察、古今作者の官職をめぐる論究を経て、「『古今和歌集』の勅撰性について」（第四章）、「儀式と和歌」（第五章）へと続き、公的社会における和歌の位置づけを論じている。また、資料編として、膨大な歴史資料群から掘り出された、桓武朝から一条朝までの天皇主催の詩宴一覧「宮廷詩宴年表」が収められており、今後の詩宴研究に必携の資料である。

これまで定説として受け容れられてきた、『古今和歌集』編纂による和歌の公的社会における地位の確立という見解が、和歌が公的文学となった後世からの評価に拠っているものであったことが、著者の丁寧で詳細な考究によって明らかとなった。資史料の徹底した調査、そこから見えてくる天皇主催の文壇・歌壇の史的展開を見据えてなされた諸論考からなる本書は、平安朝漢詩文研究にとどまらず、それ以降の日本文学研究者にとって、必読の書と言えよう。

また、著者には菅原道真をめぐる論考も多数ある。しかしそれらは、「本書があくまで文壇の変容を中心に置き、宮廷詩宴というシステムを論じ、個々の詩人の内面よりも環境・場を問題としたため、道真個人を扱う論文はそぐわない」として、収録されていない。「道真論に関しては、別途早急に纏めたい」とのことである。刊行が俟たれる。

（和泉書院、二〇〇七年二月刊、五二〇頁、八、九二五円）

―本学大学院博士後期課程―